



「健康コラム 名医が語る・お母さんへの手紙」

肺炎球菌ワクチンについて



皆さんは肺炎球菌をご存知ですか。肺炎という文字がついているので、もともとは肺炎を引き起こす細菌の一つとして捕らえられていました。しかし、インフルエンザ菌(Hi b)と並んで、小児では髄膜炎や敗血症・菌血症等の重症な感染症を引き起こす重要な細菌です。小児の髄膜炎の30%前後、敗血症・菌血症では70%が、肺炎球菌によるものです。最近問題となっている難治性・反復性の中耳炎の原因としても注目されています。

皆さんは肺炎球菌をご存知ですか。肺炎という文字がついているので、もともとは肺炎を引き起こす細菌の一つとして捕らえられていました。しかし、インフルエンザ菌(Hi b)と並んで、小児では髄膜炎や敗血症・菌血症等の重症な感染症を引き起こす重要な細菌です。小児の髄膜炎の30%前後、敗血症・菌血症では70%が、肺炎球菌によるものです。最近問題となっている難治性・反復性の中耳炎の原因としても注目されています。

肺炎球菌とHi bは似ているので、その特徴と重症化する理由を明らかにしましょう。両細菌とも莢膜きょうまく(こうまく)という殻を持っています。細菌が体に入ると、細菌を殺して体を守るための様々な反応が起こります。この反応を総称して、免疫と呼んでいます。免疫には、白血球(好中球)が直接菌を取り込んで退治するものと、抗体と呼ばれる物質によって排除されるものがあります。しかし、莢膜を持つ細菌は、好中球が取り込んで殺すことができません。乳児期初期では母体から移行した抗体により守られていますが、抗体は時間とともに減少し、半年後には消失してしまいます。抗体の減

保菌者も問題のひとつです。保菌していても健康な時には症状はありません。しかし、カゼ等を契機に体力や免疫力が低下すると、体内へ侵入して病気を引き起こしてしまいます。健康な小児の5~10%が保菌しているだけでなく、保育園の乳児では保育期間に比例して保菌率が高くなり、短期間のうちに80%を越えるとの報告もあります。もうひとつはHi bと同様に、耐性菌が増え抗生物質による治療が十分な効果が得られないという問題もあります。

保菌者が多く誰でも感染する可能性があり、重症で、治療に難渋するとなると、予防が重要であることに疑う余地はありません。予防の唯一の方法はワクチン接種です。肺炎球菌ワクチンは先進国を中心に90ヶ国以上で行われていますが、日本でも2月からやっとワクチン(プレベナー®)接種ができるようになりま

とされています。ワクチンになると副反応が気になりますが、従来のワクチンと変わらない程度で心配はほとんどありません。年齢によって接種回数が変わりますが、10才以上では免疫を持つための必要はありません。対象者と回数を示します。

●2ヶ月~6ヶ月児：初回後27日以上の間隔で3回・60日後以上の間隔で追加1回/計4回接種

●7ヶ月~1ヶ月児 初回後27日以上の間隔で2回・60日後以上の間隔で追加1回/計3回接種

●1歳児：初回1回・60日以上空けてから追加1回/計2回接種

●2歳~9歳児：1回のみ接種

小児科専門医 川村 和久

仙台市在住。医療法人社団かわむらこどもクリニック(仙台市)院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を開業理念として、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。院内報、HP、医療相談、育児サークルなどのユニークな活動が評価され、第1回広報企画賞受賞(NPO HIS研究センター)。生活ほっとモーニング(NHK)等で、活動が紹介。仙台小児科医会長。宮城県小児科医会副会長。日本外来小児科学会理事。<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>